

「なっちゃんは、ほっとけない」第3話

水瀬真理佳

〈登場人物〉

本田夏海（16） 本田家の長女、高校2年生
本田冬馬（13） 本田家の長男、中学2年生
本田春樹（8） 本田家の次男、小学2年生
本田隆（40） 亡き夏海たちの父親
本田陽菜（38） 亡き夏海たちの母親
西山凜（16） 夏海のクラスメイト
藤井拓海（16） 夏海のクラスメイト
橋龍太郎（16） 夏海のクラスメイト
佐野聖也（16） 夏海のクラスメイト
安藤大貴（13） 聖也の中学の同級生
中村康太（36） 夏海の担任
小林（16） 夏海のクラスメイト
佐藤（16） 夏海のクラスメイト

○入谷高校・2年A組・外

いつもより教室の中が騒がしい。

登校してきた夏海、首を傾げながら教

室の扉を開けると、ガタガタながらも

一般的な教室のように机と椅子が並び、

初めて見る生徒たちもいる。

夏海、瞬きして固まる。

聖也と龍太郎が後ろから、

聖也「おはよーなっちゃん」

龍太郎「おはよ」

夏海「お、おはようございます」

聖也「入んねーの？」

夏海「……ここ、私たちの教室で合ってます

よね？」

龍太郎「あゝそっか。なっちゃんはスツカス

カの教室しか見たことなかったもんな」

聖也「正直オレでも初めて見るやつ結構いる

よ。クラス一緒なものも知らなかったやつと

か」

夏海「今日って何かあるんですか……？ 特

に珍しい授業はなかったと思うんですけど
：
：
」

龍太郎「そりゃあ、もうすぐアレがあるから
な」

夏海「アレ……？」

聖也「すぐ分かるって」
と、入って行く。

○同・2年A組・中

黒板には「体育祭 種目決め」の文字。
種目は借り物競走、障害物競走、綱引
き、玉入れ、騎馬戦、全クラス対抗リ
レーがある。
担任・中村が教卓で話し合いを仕切っ
ている。

夏海「もうすぐ体育祭なんですネ！」
と、目を丸くする。

聖也と龍太郎が夏海の席の周りに来て、
聖也「オレたちみたいなバカでも、体を張れ
ば輝ける可能性がある数少ないイベントっ

てわけ」

龍太郎「バカはお前だけな。俺らを一緒にすんなって」

と、笑う。

聖也「龍だってオレと変わんねーじゃん！」

夏海、にこやかに2人を見守る。

夏海「みなさんはどの種目にするんですか？」

龍太郎「俺は借り物競走かな。なんか面白そ

うだし。聖也は？」

聖也「オレは：：綱引きにしようかな。手抜

いてもバレねーし」

龍太郎「凜は足速いからリレー走らせたいけ

ど、多分嫌がるだろうな」

凜、教室の後方で机に突っ伏して爆睡

中。

夏海「そうなんですな」

聖也「拓海はぜってえサボる！」

その時、拓海が聖也の頭を本で叩く。

拓海「誰がサボるって？」

聖也「げ、聞こえてた」

夏海「あの、運動音痴の私がみなさんに迷惑を
かけない競技ってどれでしょうか……？」

拓海「俺玉入れにするけど、良かったら本田
さんもやる？　この中だと多分一番緩いと
思う」

龍太郎「確かにそうだな」

聖也「誰が入れて誰が外したとかよくわかん
ねえし！」

夏海「ぜひ！　よろしくお願いします！」

拓海、頷く。

中村「じゃあまず騎馬戦から決めるぞー」

と、言った瞬間、の太い返事と共に5
人の手が挙がる。

中村「1クラス一騎だから1人多いな」

小林「おいコラ俺の方が早かったんだよ」

佐藤「早いもの勝ちなわけねーだろボケ」

と、立ち上がって喧嘩勃発。

小林「やんのかコラ」

佐藤「表出ろや」

と、廊下に出て行く2人。

夏海 「行かせて大丈夫なんですか！？」

聖也 「しゃーないべ。こうなったら正々堂々、勝負しねえと」

夏海 「だとしても、他にやり方が！」

と、2人を止めるために廊下に飛び出す。

拓海 「待って本田さん！」

と、声をかけるが夏海には届いていない。

拓海 「まあいっつか」

と、苦笑。

○同・廊下

夏海が廊下に飛び出すと、小林と佐藤がそれぞれ拳を出そうとしている。

夏海 「待ってください！喧嘩はダメッ」

：！？」

しかし小林と佐藤は殴り合わず、小林・佐藤 「最初はグー、ジャンケンッ」

：！」

と、ジャンケンが始める。

パーとグーで勝ったのは小林。

小林「っしやあ！！」

佐藤「クッソオー！」

と、廊下に膝をつく？

夏海「なんだ、ジャンケンか」

と、胸を撫で下ろす。

○同・2年A組

夏海が席に戻ってくる。

龍太郎「なっちゃんおかえりー」

聖也「殴り合いだと思った？」

と、笑う。

夏海「（恥ずかしそうに）はい……」

龍太郎「ほんとにそうだったらどうすんの。

なっちゃん巻き込まれてたよ」

拓海「そしたら本気で止めてたけどな」

夏海「ですよね……」

中村「じゃあ次、全クラス対抗リレーな」

早速2人の手が挙がる。

中村「あと2人、いないか？」

クラスメイト1「佐野走れよ。お前中学ん時
陸上やってたんだろ？」

その言葉に聖也が一瞬固まる。

聖也「……ムリムリ！　もう何年も走ってね
えもん。走り方も忘れたわ！」

と、カラ元気。

クラスメイト2「お前目立つの好きじゃん」
聖也「……ほんとマジそれだけは勘弁」

と、歯切れが悪くなる。

龍太郎、聖也をチラッと見て、

龍太郎「じゃあ俺走っちゃおっかな。あと
凜も走りたいって言ってた！」

と、名乗りをあげる。

凜は爆睡中。

山田「橘足速えの？」

龍太郎「俺50メートル4秒で走ったことあ
るぜ。夢の中でな」

「おいおい大丈夫かよ」
「ビリだけは
やめてくれよ」とクラスで笑いが起こ

る。

中村「じゃありレーは山田、田中、橘、西山
で決定だな」

龍太郎「うーす」

聖也、気まずそうな顔で一点を見つめ
る。

中村「じゃあ次」

と、話し合いが進む。

○同・2年A組（休み時間）

種目決めが終わり、ようやく目を覚ま
した凜が、夏海の席の周りにいる龍太
郎と拓海に文句を言いにくる。

凜「おい龍。ふざけんよ」

龍太郎「悪い。でもあのままだと聖也が走ら
されそうだったからさ」

凜「はあ？　そのどこが悪いんだよ」

拓海「そもそも、話し合い中にお前が寝てた
のが悪い」

凜「……眠かったんだよ」

夏海「佐野くん、リレーの話になってから急に元気がなくなりましたよね」

拓海「龍、なんか知ってる？」

龍太郎「……かもしれないってくらいだけど。

アイツ中学は陸上部で、それもかなり有名だったらしいんだよ。ほら」

と、スマホを見せる。画面には中学の陸上競技の大会の結果。佐野聖也（13）の名前がある。

夏海「すごい！ 1位ですよ！」

拓海「こんなすごかったなら推薦とかあっただろうに、なんで入谷なんか……」

龍太郎「……中3の時、聖也の万引きで陸上部は直前で大会出場停止、推薦も取り消されたんだと」

夏海、立ち上がって、

夏海「そんなのあり得ないです！」

拓海「同感」

龍太郎「俺も信じてねえよ。ただの噂だ」

凜、興味なさそうに外を見ながら、耳

はしっかり傾けている。

○商業施設・靴屋

休日、夏海と春樹は2人で春樹の靴を
買いに行く。

商業施設に着いて靴屋に向かう途中、
聖也が1人で歩いているのが見える。

春樹「あ！　せいや！」

と、走っていく。

夏海「コラ。聖也くん、でしょ」

聖也「いいよなっちゃん」

聖也、春樹の頭に手を置いて、

聖也「よお。覚えててくれたんだな。姉ちゃ

んと買い物か？」

春樹「うん！　速く走れるくつ買ってもらう

んだー！」

聖也「楽しそうだな。オレも一緒にいいか？」

春樹「うん！」

夏海「いいんですか？」

聖也「おう！　どうせヒマしてたから」

聖也、春樹に合う靴を一緒に見てくれる。

まるで店員のように詳しい。

春樹「すげー！　せいやちよーくわしいじゃん！」

と、興奮。

聖也「はるき、走るの好きか？」

春樹「すき！　この前ね、オレ50メートル走クラスで1位だったんだよ！」

聖也「マジで！　すげえじゃん！」
聖也に褒められて得意げな春樹。

春樹「せいやも走るの好き？」

聖也「オレ？　いやオレは……」

と、返事に困る。

しかし春樹は止まらない。

春樹「なあ、今からオレのれんしゅうつきあってよ！　速く走るコツおしえて！」

聖也「んんー……」

と、困惑する。

見かねた夏海が止めに入る。

夏海「ダメだよ。練習ならねえちゃんが見てあげるから」

春樹「……せいやヒマだって言ったのに。ウソつき……」

と、拗ねる。

夏海「一緒に靴選んでもらったでしょ？ もう終わり」

春樹「ちえっ……」

と、口をへの字に曲げる。

あまりにも残念そうにする春樹を見て、気が変わる。

聖也「はるきの言う通りだ。ウソつきはよくないよな」

春樹、顔を輝かせて

春樹「いいの！？」

聖也「おう！」

春樹「っしゃ！」

と、ガッツポーズ。

夏海、盛り上がる春樹と聖也を見て、仕方ないなと笑う。

○区立公園・トラック

老若男女がコースをランニングする中、
春樹は端の方で短距離を何度も走り込
む。

横で聖也が声をかける。

聖也「いいぞいいぞ！腕しっかり振れよ

ー！」

2人の様子を、夏海はトラックの外の
ベンチに座って見守る。

いつも以上に生き生きしている聖也。

夏海 M「あんなに楽しそうなの……」

× × ×

聖也が水を飲み、夏海の元に来る。

春樹は凄まじい集中力で自主練。

その様子を2人で眺めながら会話。

聖也「ホントに楽しそうに走るよなあ……な

んかこっちまで走りたくなる」

と、しみじみ。

しかし夏海からの視線を感じて我に返

り、

聖也「って、じょーだんじょーだん。リレー断ったやつがなに言ってるんだよってな！」
と、慌てて否定。

夏海「（意を決して）中学の時、陸上をやったって聞きました……どうしてやめちゃったんですか……？」

聖也「……（バツが悪そうに）それ知ってるなら聞いたろ？俺の万引きのせいでうちのチームは大会出られなくなった。みんなスゲェ頑張ってたのにさ。そんな迷惑かけたヤツにはもう走る資格なんてねーよ」

夏海「……それは聞きました。それに、佐野くんが万引きなんてしていないことも分かっています」

夏海の迷いのない真っ直ぐな瞳に救われる聖也。

聖也「なっちゃんらしいな」

と、小さく呟いてゆっくりと話し出す。

○（聖也回想）中学校・体育館

集会にて、壇上に呼ばれて陸上の表彰をされる聖也（15）。

聖也が列に戻ると、クラスメイトが話しかけてくる。

男1 「へ嫌味たっぷり（いいよなあ。3年間走っただけで高校決まるやつは。お気楽で羨ましいぜ」

しかし聖也は嫌味だとは思っていない。

聖也 「いやあ、オレ走り以外なんもできねえからな。ちゃんと勉強やってきたお前からこそカッケえよ。お互い頑張ろうぜ！」

聖也のまさかの返しに苛立ちを感じるクラスメイト。

ほどなくして集会が終わり、先に戻って行く聖夜の背中を見ながら、陰口を叩く。

男2 「なにアイツ。ウゼェ」

男3 「ほんっとバカだよな」

○同・廊下

一方、親友であり同じ陸上部の安藤大貴（13）と並んで教室に戻る途中の聖也。

大貴「お前、さっきの嫌味だぞ」

聖也「え？」

大貴はため息をつき、

大貴「まあ、お前が気にしてないならいいよ」

聖也「全然気づかなかったわ！でもオレに

走りしかないのは事実だし。アイツらの言

うことは正しいけどな！」

と、楽天的。

大貴は安心して、

大貴「次の大会、絶対勝つぞ。頼りにしてる

からな、エース」

と、聖也の背中を叩く。

聖也「任せろ部長！」

と、指でグッドマークを作る。

○商店・店内（夜）

部活終わり、聖也が1人で店内を回っ

ていると、商品を抱えた客とぶつかっ
てしまう。

聖也 「すみません！」

聖也は肩にかけていたエナメルを後ろ
に置き、客と一緒に落ちた商品を拾う。
客 「（俯いたまま）ありがとうございます」

と、レジに向かう。
それから聖也もおにぎりを取ってレジ
に向かおうとすると、店員から肩をト
ントんとされる。

店員 「君。ちょっとカバンの中見せてくれ
る？」

聖也 「カバン？ 別にいいですけど……」

しかし聖也がエナメルバッグを開ける
と、中には全く覚えのないお菓子と漫
画が入っている。

聖也 「なんだこれ……」

店員 「悪いけど警察呼ばせてもらおうよ。万引
きは犯罪だからね」

聖也 「待ってください！ 俺こんなに入れて

ません！」

店員「この状況でよくそんな嘘がつけるな！

警察が来るまで大人しくしてなさい」

店員は聖也の話に耳を貸さず、聖也は唇を噛み締める。

○中学校・校長室（翌日）

聖也が生気を失った表情で校長室から出てくる。

そこへ大貴が駆けつける。

聖也の肩を掴んで、

大貴「冗談だよな？ 頼むから間違えなかったって言ってくれよ！」

聖也「……（鼻声で）ごめん。オレだけの問題だから、みんなは大会に出れるようにしてくれって頼んだけど、ダメだった……マジで申し訳ない。死んでも償ないきれねえ」

大貴「ちげーよ！ 俺が聞いているのは聖也お前のことだ！ お前が万引きなんてするわ

けねえのは分かってんだよ！　なのになん
で……何があった！？」

聖也「……オレがカバンに入れてるところを
見たってやつがいたらしい。店に防犯カメ
ラはなかったし、見たやつがいるならもう
どうしようもねえよな！」

大貴「なんだよそれ……どこのどいつだ
よ！！！」

と、拳で壁を殴る。

聖也「最後の大会、大貴と走れんの楽しみに
してたんだけどな……（自嘲するように）
まさか自分が台無しにするとは」

大貴「……確かに俺ら3年にとっては中学最
後の大会だったし悔しさはあるよ。だけ
俺、一般で必ずお前と同じ高校受かってみ
せるから！　そしたらこれからも一緒に走
れるだろ？」

と、笑顔。

しかし聖也の表情は変わらない。
聖也「……オレは陸上やめるよ」

大貴「なんで……！　もし変な責任とか感じ
てんなら、」

聖也「（わざと明るく）ホントは高校で陸上
続けるか迷ってたんだよ。練習とかダルい
し、部活入ったら遊べねーじゃん？　今回
のことで推薦も取り消しになったからちよ
うど良かったわ。高校行ったらカノジョ作
って遊びまくる！」

と、満面の作り笑い。

大貴「そんな下手くそな嘘はいらないんだ
よ！　推薦なくなったならなおさら一緒に
頑張ろうぜ！　俺もそんな頭いいわけじゃ
ないけど、協力する！　とりあえず先生に
相談しに行こう」

聖也は親友の話を遮るように、
聖也「もういいって！」

と、声を張る。

大貴「……」

聖也「（トーンを落として）そういうのマジ
でいいから。もう俺のことはほっといてく

れ」

光を失った聖也の瞳に、親友はそれ以上言葉が出てこない。

○中学校・教室（数ヶ月後）

担任「佐野！　なんだその髪色は！」

担任は聖也の青い髪を指さす。

聖也「先生が染めてこいつて言うから」

担任「黒染めに決まってるだろ！！！」

聖也「まあまあ落ち着いて。あんまり怒ると

また血圧上がるよ先生」

担任「誰のせいだと思ってるんだ！　こら待て、まだ話は終わってないぞ佐野！」

担任は話の途中で教室を出て行った聖也を追いかける。

聖也が出て行ってからクラスメイトが聖也について口々に話し始める。

女子1「佐野くんどうしちゃったんだろうね」

女子2「やっぱあの事件じゃない？」

男子1「あれびっくりだったよな」

男子2 「しかも本人は最後までやってないって言ってたんだろ？」

男子3 「カバンの中に証拠あんのにそれはメンタル強いわ」

聖也のことを好き勝手言うクラスメイトたちに我慢ができず、逃げるように教室を後にする大貴。

○同・廊下

大貴が廊下を歩いていると階段の上から話し声が聞こえてくる。

男2 「佐野のやつマジウケんだけど」

男1 「へ嘲笑うように」アイツ絶対高校行けないだろ」

男3 「へ笑いながら」いや、誰のせいだよ」

男1 「俺は別に、ただぶつかっただけだしい」

男3 「よく思いついたよな。店の中でわざとぶつかってアイツに物拾わせてる隙に、荷物の中に未会計の商品詰め込むなんてシナ

リオ」

男1 「（ドヤ顔で）才能？」

大貴 「おい。今のどういことだよ」

と、怒りを孕んだ声で詰め寄る。

男2 と3 は狼狽えるが、男1 は全く動

じない。

男1 「そんな怖い顔してどうした？」

大貴 「お前らがやったんだな：：お前らが聖

也をハメたんだろ！？」

と、男1 の胸ぐらを掴む。

男1 「言いがかりはよせよ。俺らがやったっ

て証拠はどこにもない」

挑発するような言い方に、大貴はつい

に我慢できなくなり、殴りかかろうと

する。

しかしその手を止めたのは聖也。

聖也 「バカ、何やってんだよ」

大貴 「離せ！ 全部コイツらが仕組んだこと

だった！ お前は濡れ衣着せられたんだ

ぞ！」

一瞬聖也の瞳が揺れるが、まるで他人事のように落ち着いている。

それどころか、

聖也「殴られたくなかったら俺が止めてる間に行った方がいいぞー」

と、男たちをその場から逃す。

大貴も聖也の手を振り切ってどこかへ行こうとする。

聖也「どこ行くんだよ」

大貴「校長に言いに行くんだよ！ 犯人はアイツらだって！」

聖也は大貴の肩を掴んで止める。

聖也「やめろって！ その話はもういいつつったろ」

大貴「なんでお前が罪被んなきゃいけないんだよ！」

聖也「・・・」

大貴「お前がやってないって分かれば、推薦取り消しもきつと取り消してもらえる！

あんな奴らのせいでお前が陸上諦めんの納

得いかねーよ！」

魂の叫びにも聞こえる大貴の言葉に、
聖也はたったひと言。

聖也「：：大貴、ありがとな」

と、最後に作り笑いではない、自然な
笑顔を見せて歩き出す。

大貴「聖也！ほんとに諦めていいのか

よ！？なあ、また一緒に走ろうぜ！せ
いやあーっ！」

大貴は聖也の背中に向かって叫ぶが、
聖也は無視して歩き続ける。

（回想終わり）

○区立公園・トラック（夕方）

夏海「私も安藤くんと同じ考えです。佐野く
んは無実の罪を着せられたんですよ！？
なんでそのこと言わなかったんですか！」

夏海が怒る一方で、聖也は冷静。

聖也「なんかもう、どーでもよくなつてさ。
それに、オレのせいで大事な大会出れなか

ったことになりはねーし。それだけはお
う、償いきれねえもん……」

夏海「だからって、佐野くんが走るのを諦め
る必要はないですよ……」

大貴と同じように憤慨する夏海に懐か
しさが込み上げる。

夏海「佐野くん。やっぱり体育祭のリレーは
佐野くんが走ってください！」

聖也「何言ってるのムリムリ。もう全然走っ
てねえもん」

と、一点張り。
しかし夏海も譲らない。

夏海「でもまだあと1週間ありますし！
っと西山くんも二つ返事で代わってくれま

すよ。私明日事情説明しま……」

聖也「（強めに）いいんだって！」

と、聖也の声が夏海の言葉を遮る。

夏海はもちろんのこと、言った本人も
驚く。

聖也「（トーンを落として）そういうのマジ

でいいから」

夏海「……ごめんなさい。私また余計なことを」

と、素直に頭を下げる。
すると春樹が休憩をしにやってくる。
夏海たちの間に流れる微妙な空気に気づいて、

春樹「どうかしたの？」

夏海「ううん、なんでもないよ。そろそろ帰ろっか。ねえちゃんバイト前にご飯食べないと」

春樹「ええー？ まあオレもおなかへったし
いつか。せいや今日はありがとな！」

と、拳を出す。

聖也「おう、またな春樹」

と、春樹の拳に自分の拳を当てる。
夏海はペコッと頭を下げて春樹と共に
帰っていく。

聖也、夏海たちを見送ってから地面に
座り込み、トラックで走る人たちを眺

める。

聖也「へっくしょん」

あたりはすっかり暗くなる。

○本田家・リビング（夜）

夏海「はあああ。私はまた余計なことを……」
と、溶ける。

冬馬「夏海のおせっかいなんて今に始まったことじゃないじゃん」

冬馬の容赦ない一言が夏海に突き刺さる。

夏海「うっ……気をつけなきゃいけないって分かってるんだけどね……佐野くんに嫌な思いさせちゃったな」

冬馬「ちようどよかったよ。もうこれ以上入谷のやつらとは関わらないこと！ いいいな！？」

春樹「せいやは見た目ヤンキーだけど、ちよ……いいヤツだよ！」

夏海も激しく頷く。

冬馬「そいつだけじゃない。あの凜とかいうやつ、入谷の白虎って呼ばれてるヤバイやつなんだろ？」

春樹「びゃっこって？」

しかし春樹の疑問はスルーされる。

夏海「それは周りが勝手にそう呼んでるだけで、西山くんは勘違いされやすいけど、本当はとっても優しい人なんだよ！」

冬馬「夏海のそういうお人好しなところが心配なんだって！　優しい人は、普通白虎なんて呼ばれないからな！　絶対何かヤバい過去があるんだよ」

白熱する議論に春樹が叫ぶ。

春樹「だーかーらー！　びゃっこってなに！！」

夏海と冬馬「中国の神話に出てくる白い虎の神様！」

夏海と冬馬が息ピッタリにハモリ、本人たちも驚いて顔を見合わせる。すると、春樹が我先にと、

春樹「ハッピーアイスクリーム！」

と、言い切る。

しかし、夏海と冬馬は首を傾げる。

春樹「（得意げに）ねえちゃんと冬馬、オレにアイスおごりだかな！」

春樹はニヤツとして自分の部屋に向かう。

冬馬「なんでそうなるんだよ。それルール違うぞ。おい春樹！」

と、春樹を追いかける。

夏海「ハッピーアイスクリームって何？ 私にも教えてよー！」

夏海も訳が分からず二人を追いかけ、相変わらず賑やかな本田家。

○入谷高校・資料室

夏海、凛、拓海、龍太郎がお昼を食べ
ているが、聖也の姿はない。

拓海「聖也いないとなんか静かだな」

龍太郎「いつも昼だけはわざわざ学校に食べ

にくんのにな」

と、聖也とのメッセージ画面を開く。

「龍太郎…今日こねーの？」というメッセージに既読がついていない。

夏海「（申し訳なさそうに）私のせいかもしれない。……」

龍太郎「どゆこと？」

夏海「実は土曜日だったり佐野くんに来て、春樹の走りを見てくれたんですけど……その時私が『体育祭のリレーは佐野くんが走ってください』って言ったので、気を悪くしたんだと思います」

そこで凜が間髪入れずに

凜「それはねーだろ」

と、口を開く。

拓海と龍太郎も頷く。

拓海「ないない。そんなの一晩寝てすっかり忘れてるよ」

龍太郎「いや、アイツのことだから3歩歩いて忘れてるかも」

と、笑う。

しかし夏海は、3人が気を遣って
くれると思いきや、神妙な顔つき
のまま。すると凛がおもむろに立
ち上がる。

龍太郎「どうした？」

凛「……帰る」

拓海と龍太郎は視線を交わし、何やら
口角を上げる。

夏海「もう帰っちゃうんですか……？」

凛「……やることねえし」

龍太郎「俺も帰ろっかな」

夏海「橘くんさっき来たばかりじゃ
ないですか！」

拓海「じゃあ俺も」

夏海「藤井くんまで！？」

龍太郎「なっちゃんコレ！部屋出
る時鍵閉めよろしく！俺の靴箱入
れといて！」

夏海は龍太郎が投げた鍵をキャ
ッチ。

部屋に一人取り残される。

夏海「帰っちゃった……」

と、少し寂しそう。

○コンビニ（夜）

バイトを終えた夏海が店を出ると、自転車にまたがった凧がキャンディを啜えながらスマホを見ている。

夏海「西山くん!?」

凧、夏海を見て、

凧「バイト終わりだろ？ 帰ろうぜ」

夏海「は、はい！」

夏海は不思議に思いながらも、急いで自分の自転車を取りに行く。

○川沿いの道（夜）

自転車で並走する夏海と凧。

走りながら、凧が話を切り出す。

凧「：：聖也だけど、風邪引いて熱出たらしい。今日来なかったのはそれが理由」

夏海「熱!? 具合は大丈夫なんでしょうか
：：？」

凜「やめとけつつったのにカップラーメンとか食ってたし、まあ平気だろ」

夏海「フツ佐野くんらしい。体調は心配ですけど、とりあえず連絡がとれて良かったです」

凜「連絡ってか：：直接家行った」

それを聞いて夏海は急ブレーキをかけて自転車を止める。しかしその反動で自転車ごと凜の方に倒れ込みそうになる。

凜「あぶね」

凜は片方の手で夏海の自転車を支え、もう片方の手で軽々と夏海を受け止める。

凜に抱きつくような格好になった夏海。

夏海が顔を挙げると、凜と至近距離で見つめ合うが、お互い特に意識する様子はない。

夏海「（申し訳なさそうに）すみません」

と、体勢を立て直す。

凜「ってわけで、聖也のことは夏海のせいな
んかじゃねえから、もう気にすんなよ」

夏海、小さく笑う。

夏海「それを言うためにコンビニまで来て待
っててくれたんですね。ありがとうございます
ます」

凜「夏海、の性格だと、気にして夜も眠れなく
なりそうだからな」

夏海「西山くんには隠し事できませんね」

と、苦笑い。

凜「聖也、夏海の言ったことなんて全然気に
してなかったし、むしろ夏海に謝りたが
ってたぞ」

夏海は少し考えた後、告白し始める。

夏海「（真面目に）実は私、すごく足が遅く
てですね」

夏海、の突然の告白に凜は吹き出して、

凜「まあ、速そうには見えないわ」

夏海「（不満気に）そこは思っただけでも

『え、意外！』って言うところですよ」

凜「（笑いながら）それはそれで『お世辞はいりません』とか言って怒りそうじゃん」

夏海「なんで分かるんですか！」

凜「夏海は分かりやすすぎ」

夏海、恥ずかしさを隠すように咳払いをして話を戻す。

夏海「……そういうわけで、走るのなんて好きじゃなかったのに。佐野くんがとっても楽しそうに春樹にアドバイスしてるのを見てたら、私も走ってみたいって思ったんです」

凜は頷く。

凜「アイツ、陸上が嫌になったわけじゃねえんだな」

夏海「そうなんです！ だからリレーも走ればいいのになって思ったんですけど……出しゃばりすぎました」

と、反省。

凜「走らないって言ってるやつに走れって言ったって、そりゃそうなるだろ」

夏海「ですよね……でも佐野くんが走ってる
ところ、見てみたかったなあ。ほんの些細
なことでも、何かきっかけさえあればきつ
と……」

凜が夏海を見る。夏海は凜が呆れてる
と思ひ慌てて、

夏海「分かってます！もうこのことにつ
いては忘れます！大人しくします」

しかし凜は何やら考えている。

夏海「西山くん？」

凜M「きっかけ、か」

○入谷高校・グラウンド

迎えた体育祭当日。

保護者の来場もあり、大賑わい。

順調に種目が進み、ついにリレーが始
まろうとしたその時。

凜「ヤベェ頭割れる。目眩止まんねえ腹痛い
吐きそう」

と、淡々と体調不良の症状を並べる。

しかし、そう言ってるわりに見た目は辛くなさそうで反応に困る一同。

夏海「大丈夫ですか！？ 熱は？ 触ります

ね」

と、凜の額を触り、夏海だけが親身になって心配する。

龍太郎が「元気そうにしか見えねーんだけど……」と言っている途中で、凜が死にそうな咳をして言葉をかき消し、鋭い眼光を飛ばす。
そこでようやく凜の狙いに気づいた拓海と龍太郎。

龍太郎「へわざとらしい〜あ、あー！ 多分

聖也の風邪が移ったんだよ絶対そうだ」

拓海「残念だけど、リレ―は別のやつに走ってもらわないとな」

そして4人は一斉に聖也の方に顔を向ける。

聖也「いやいやいや！ ムリだかなん！？」

龍太郎「お前の風邪が移ったせいなんだから

責任取れよー」

聖也「それは悪かったけどさ！ だからって

…

凜「聖也」

と、真っ直ぐ聖也を見る。

聖也「…ん？」

凜「悪い。あとは頼んだ」

有無を言わせず、全てを託すように聖也の肩に手を置く。

そして夏海に向かって、

凜「夏海、保健室行くから肩貸してくれ」

夏海「はい！」

夏海は聖也を心配そうに一瞥してから凜と共に歩き出す。

しばらく歩いてから、

夏海「佐野くん、大丈夫でしょうか…」

夏海がこぼすように言うと、

凜「そろそろいいな」

と、夏海の肩に回していた腕を離して立ち止まる。

夏海「大丈夫ですか？ 担架持ってきてしましょ

うか！？」

凜「夏海はまだまだ俺のこと分かってねえな」

夏海の頭にはハテナマークが大量に浮かぶ。

凜「（笑いながら）夏海が一番騙されてどうすんだよ」

夏海「騙す：：もしかして具合悪いのは嘘だったんですか！？」

凜は頷く。
その時、パァーンというピストルの音でリレーが始まる。

凜「ほら、アイツが走るとこ見に行くぞ」

夏海と凜はトラック全体がよく見える位置に移動。

2年A組は途中の転倒により、最下位でボタンがアンカーの聖也に渡される。

夏海「佐野くん：：」

夏海は祈るように手を握り、ゴクリと喉を鳴らす。

すると、最後尾の聖也がコーナーを曲がり最後の直線に入ると、みるみるうちに前のランナーたちを追い抜いていく。ついにトップの選手まで追いつくと、わずかな差で聖也の体が先にゴールテープを切る。どんでん返しの展開に歓声が沸き起る。

夏海はあまりの出来事に感動で胸がいっぱい。

聖也はゴールの所でクラスメイトに囲まれて笑っている。

凜「うまくいったってことでいいよな」

夏海「はい！ 西山くんのおかげです」

凜「夏海のおせっかいが移ったわ」

夏海「風邪みたいに言わないでくださいよ」

夏海と凜が会話していると、聖也が走ってくる。

聖也「りーりん！ なっちゃんーりん！」

夏海「（慌てて）あああの、実は人が多くて
進めなくって、今から保健室に行く所なん
です……！」

と、まだ言い訳。

聖也「なっちゃんもういいよ。2人が見てく
れてたの、走りながら見えてたし」

夏海「（気まずそうに）すみません……」

凜「（わざとらしく）あーなんか急に体がラ
クになったわ」

と、伸びをする。

聖也「（笑いながら）そんなへたくそな演技
でよく言うぜ」

と、肩で小突く。

聖也「でも……ありがとな、2人とも。いい
思い出になった！ オレやっぱ走るの好き
だわ」

と、しみじみ言う。

そこで夏海はいいことを思いつく。

夏海「佐野くん……やっぱり、もう少しおせ
っかいさせてください！」

聖也「え？」

と、目が点。

○入谷高校・2年A組（後日・休み時間）

夏海は聖也の机に参考書の山と、大学のパンフレットを乗せる。

聖也「ナツチャン、ナニコレ……」

と、顔が引き攣る。

夏海「前の学校で使っていた教材です！ 陸

上部が有名な大学もピクアップしました。

今からやれば大丈夫です！」

聖也「何言ってるのなっちゃん。オレが大

学？ この学校で1番バカだよオレ。推薦

もないのにムリムリ」

夏海「（ハッキリと）問題ないです。私が絶

対合格させてみせます！」

と、手を差し出す。

夏海の漢らしいセリフにハツとする聖也。

凜「……やってみりゃいいじゃん」

龍太郎「ヒュー！ なっちゃんカッコいい」
拓海「俺も付き合おうよ」

仲間たちの後押しを受け、聖也は親友
の言葉を思い出す。

※ ※ ※

（フラッシュ）

大貴「そんな下手くそな嘘はいらないだ
よ！ 推薦なくなったらならなおさら一緒に
頑張ろうぜ！ 俺もそんな頭いいわけじゃ
ないけど、協力する！ とりあえず先生に
相談しに行こう」

※ ※ ※

決意が固まる聖也。

聖也「（照れ隠しするように）しよーがない
な！ なっちゃんがそこまで言うなら、
頑張ってみるか。頼んだぜ、なっちゃん先
生」

と、夏海の手を握り返す。

夏海「はい！」

と、嬉しそうな笑顔。

（了）